

平成30年度佐賀県小・中学校学習状況調査[12月実施]結果を受けた取り組みについて

- 1 調査実施日 平成30年12月4日～5日
- 2 調査方式 悉皆調査方式（全数調査）
- 3 調査の対象学年

1年	国語、数学、理科、社会、英語
2年	国語、数学、理科、社会、英語

4 教科に関する調査結果

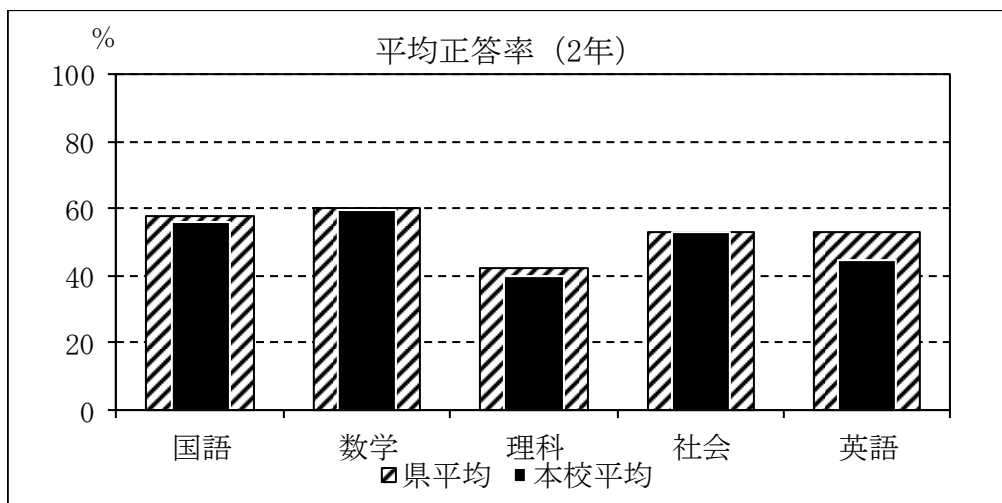
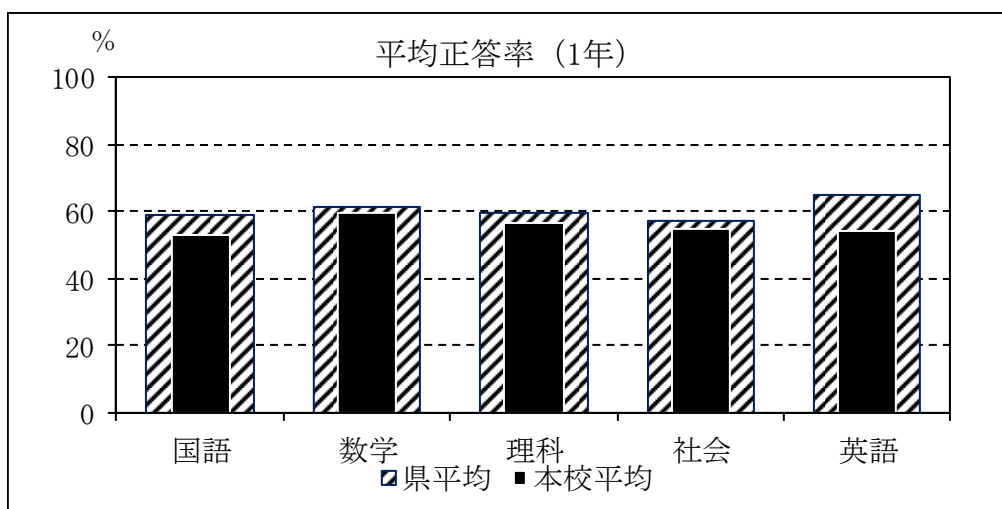
本校の状況については、次の表のように、10区分の教科において2年の理科と英語が「要努力」の結果でした。ただ、「十分達成」基準に到達した教科はなく、県の平均正答率もすべて下回っていました。

	国語	数学	理科	社会	英語
1年	○52.9 (59.1)	○59.3 (61.2)	○56.7 (59.4)	○54.7 (57.1)	○54.2 (65.2)
2年	○55.9 (57.8)	○59.4 (60.0)	▼40.1 (42.2)	○53.0 (53.1)	▼44.5 (53.0)

※ 上段は本校の平均正答率、下段()は県平均。

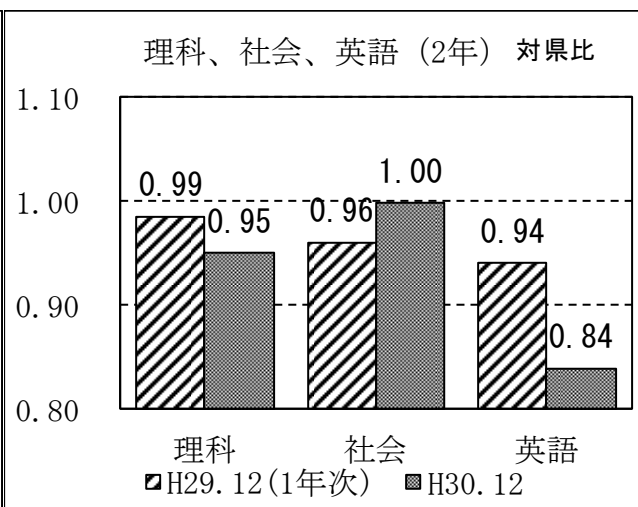
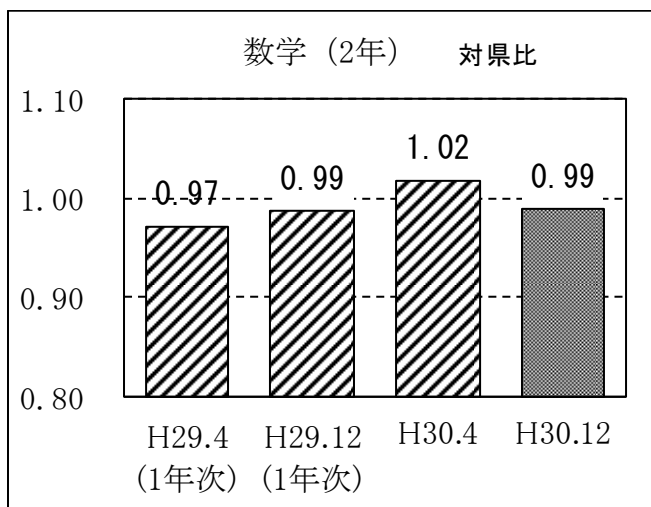
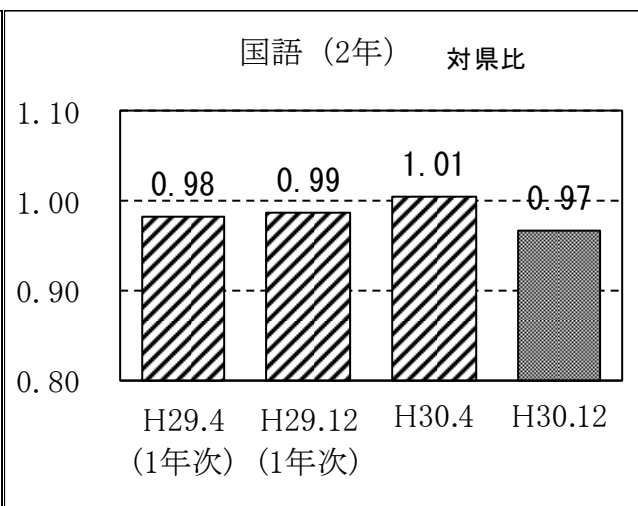
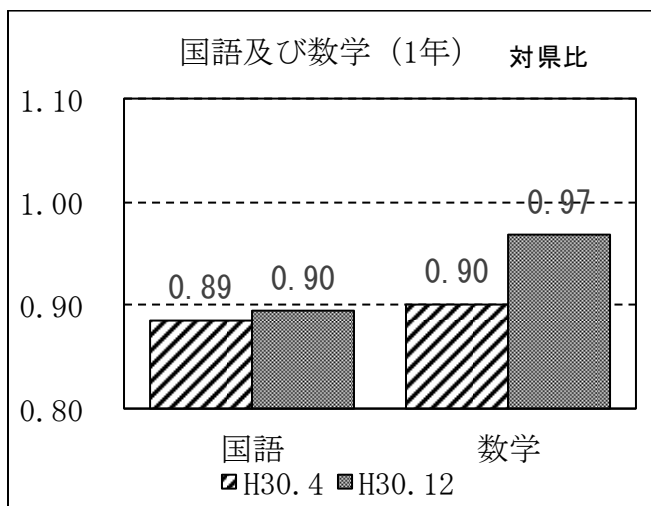
※ ◎印は「十分達成」基準に到達、○印は「おおむね達成」基準に到達、▼印は「要努力」。

※ 正答率単位は%。



国語と数学は、平成 30 年 4 月 17 日実施の対象教科でしたので、この 2 教科について推移を見ると、県平均を 1.00 とした比で下のようになりました。すべて県平均を下回っていますが、1 年国語と数学は差が縮まりました。対県比で+0.01、+0.07 で微増ながら 4 月実施より向上し、改善しています。逆に 2 年は、2 教科とも対県比は-0.04、-0.03 でマイナスとなりました。

	国語			数学		
	4 月実施	12 月実施	4 月実施からの増加分	4 月実施	12 月実施	4 月実施からの増加分
1 年	0.89	0.90	+0.01	0.90	0.97	+0.07
2 年	1.01	0.97	-0.04	1.02	0.99	-0.03



また、2 年生の理科及び社会、英語は、1 年時の平成 29 年 12 月に実施された結果と経年比較しました。次の表やグラフのように、社会は県平均と同程度となり大きく改善した一方で、県平均を下回る理科と英語はその差が、より大きくなりました。

	理科			社会		
	H28.12 実施 [1 年時]	12 月実施	1 年時からの増加分	H28.12 実施 [1 年時]	12 月実施	1 年時からの増加分
2 年	0.99	0.95	-0.04	0.96	1.00	+0.04

	英語		
	H28.12 実施 [1 年時]	12 月実施	1 年時からの増加分
2 年	0.94	0.84	-0.10

ただし、本調査は、いわゆる 100 点満点のテストではなく、問題の難易度に関わらず、正答した問題数の割合を示しており、この平均正答率だけでは詳細は分からず、教科ごと設問ごとの分析によって強みや弱みが明らかになります。また、本調査により測定できるのは、学力のうちのおくまで一部であり、すべてではありません。

各教科の観点別及び抜粋した設問ごと正答率による分析の一部は、次のとおりです。

(1) 国語 (2 年)

設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	1一	4二	5六
平均正答率	67.0 (75.3)	12.9 (19.3)	32.5 (40.2)
無解答率	0.0 (0.3)	20.1 (31.0)	1.0 (1.8)
観点	話す・聞く	読む	知識・理解・技能
出題の趣旨	話の論理的な構成や展開などを捉える。	文章の展開について自分の考えをもつ。	行書のきまりを知る。

全 34 設問の平均正答率では、55.9%で、県が示す到達基準のおおむね達成基準 49.7%を上回っているものの、県平均の 57.8%を下回りました。設問別でみると、1一や4二、5六などに課題が見られました。

1一は、「話す・聞く能力」観点の問題で、県平均を 8.3 ポイント下回りました。問題内容は、話の論理的な構成や展開などを捉える「話す・聞く」領域で、副会長の発言の特徴を選択肢の中から考える問題でした。誤答の原因として、副会長という立場だけで判断し、「話し合いを進めている」という特徴を選択する誤答がありました。役職名ではなく、話し合いの流れと意見の内容を正確に読み取ることが必要です。

4二は小説の文章の展開について自分の考えをもつ「活用」に関する記述式の問題でした。県平均も低いですが、本校平均は更に 6.4 ポイント下回り 12.9%でした。無解答率も 20.1%でした。登場人物の描写を整理し、それを根拠として登場人物の心情を説明するために、他の登場人物の描写と比較したり、時系列で心情描写や行動描写の変化を図示したりすることができるように、計画的に授業に位置付けます。

5六は、「原」という字の 1 画目から 2 画目を行書で書くときの特徴「点画の連続」に関する選択式問題でした。到達基準のおおむね達成基準 55%を大きく下回り、32.5%でした。書写の授業の中で実技の習得と同時に、「きまり」など知識の定着にも更に力を入れていくことが必要です。

(2) 国語 (1 年)

4 月実施調査では県平均にやや及ばず、対県比は 0.89 でした。今回も県平均を 6.2 ポイント下回りましたが、平均正答率は 52.9% (対県比 0.90) で県平均との差がやや縮まり改善できました。設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	1一	1五	5三
平均正答率	30.9 (48.5)	26.8 (41.1)	27.8 (50.5)

無解答率	0.0 (0.2)	15.5 (9.6)	1.5 (1.2)
観点	話す・聞く	話す・聞く	知識・理解・技能
出題の趣旨	分かりやすく伝えるために話の構成を工夫する。	伝えたいことを述べるために、どのような事実を取り上げるかを考えて話す。	文節の区切りを理解する。

1一は、「気になる言葉」について発表する場面において、どんな工夫がしてあるかを考える選択問題で4つの選択肢の中から「当てはまらないもの」を選ぶ出題でした。無解答は目立ちませんが正答率は30.9%で、到達基準のおおむね達成基準55%を大きく下回りました。「当てはまるもの」のつもりで答えていたのかまでは確認できませんが、選択肢の中の「自分の体験を取り入れている」「調べたことを説明している」「呼びかけの表現を使っている」などの工夫についての再確認が必要です。

1五は、示された【資料】から読み取ることができる情報を用いて、説明を付け加えて書く「活用」に関する記述式問題でした。正答率は26.8%で県平均を14.3ポイント下回りました。到達基準も低く設定してあり、難易度の高い問題でしたが、発表原稿に付け加える形式になっていない解答や一文で書くことができているものも多く見られました。条件を踏まえて書く力が求められます。

5三は、文を文節に区切る問題で、「知識・理解・技能」領域の短答式の問題でした。正答率は27.8%で、県平均を22.7ポイント下回りました。「きれいな花が一輪咲いていた。」がいくつかの文節に区切られるかを問う問題で、多くは「咲いて / いた」の補助の関係になっているところを一文節と考えた誤答が目立ち、定着できていません。文節の区切り方が十分理解できていないことが明らかです。言葉の単位（文節、単語）について再度理解させ、折に触れ定着するようにします。昨年度も同調査で、「雨が降ったけど、昼にはやんだよ。」の文について出題されました。このときも正答率は39.7%で県平均を16.6ポイント下回っていました。

(3) 数学 (2年)

全30設問の平均正答率では、59.4%で、到達基準のおおむね達成基準49.8%を上回りましたが県平均の60.0%を0.6ポイント下回りました。観点別の正答率を県平均と比較すると、「数学的な技能」では県平均を3.4ポイント下回りましたが、「見方や考え方」「知識・理解」の観点では県平均を上回りました。

設問別では次のような課題が見られました。

観点別・問題別平均正答率等 ※ () は県平均

	数学的な見方や考え方		数学的な技能		数量や図形などについての知識・理解	
平均正答率	42.5 (39.1)		62.9 (66.3)		62.6 (61.6)	
無解答率	13.8 (15.4)		11.2 (9.5)		2.9 (3.7)	
問題例	5(3)	12.7 (14.9)	2(2)	40.6 (41.9)	6(4)	25.4 (32.2)

			2(3)	41.1 (48.9)		
--	--	--	------	----------------	--	--

5(3)は、3段に並んでいる○の1段目に、連続する3つの奇数を順に入れていき、数の規則性を考える問題で、連続する3つの偶数に変えたとき、3段目の数がどんな数になるかを考えて正しいものすべてを選ぶ選択問題でした。到達基準のおおむね達成基準40%を大きく下回りました。「活用」に関する難易度の高い問題ですが大きな課題です。正答は「3段目の数は、いつも1段目の真ん中の偶数の4倍である」と「3段目の数は、いつも8の倍数である」の2つでした。文字を使って事柄が成り立つ理由を説明することも大事ですが、本設問のような発展的に考えて新たな性質を見いだすことができる見方や考え方も求められます。

2(2)(3)も課題が残りました。(2)は文字式に数を代入して式の値を求める基本問題でした。代入する前に、式を簡単にすることが必要ですが、1(2)では73.6%の正答率でしたので、ほぼできていたと思われます。正答率が40.6%であったことから、代入して計算する段階で間違っていると見られ、分数の計算の定着が必要です。2(3)は等式を目的に応じて変形する内容「等式 $3x - 2y = 10$ を、 y について解く」という基本問題です。41.1%で定着できていません。方程式を解いたり、関数領域や図形領域でも利用したりする場面もあり、折に触れて扱うようにします。

6(4)は正四角錐の側面積の求め方を考える基本的な選択式問題でした。十分な定着が見られません。角錐の体積を求める公式と混同している傾向が見られます。表面積や側面積、体積など再度整理して、定着を図ります。今後、3年次の図形の計量にもつながり、必要な学習内容になります。

(4) 数学 (1年)

全31設問の平均正答率は59.3%で、県平均の61.2%を1.9ポイント下回りました。平均正答率は到達基準のおおむね達成基準51.1%を上回りましたが、設問別に見ると、11問がおおむね達成基準を下回っていました。また、県平均を上回った設問は31問中11問に止まっています。観点別の正答率を県平均と比較すると、すべての観点で県平均を下回りました。「活用」に関する問題において、県平均を上回っていたのは全5問中1問でした。

設問別で次のような課題が見られました。

観点別・問題別平均正答率等 ※ () は県平均

	数学的な見方や考え方		数学的な技能		数量や図形などについての知識・理解	
	平均正答率					
平均正答率	42.3 (49.4)		57.9 (59.1)		68.9 (69.4)	
無解答率	24.9 (16.3)		5.5 (5.0)		3.9 (3.0)	
問題例	8(2)	29.4 (45.1)	3(1)	31.4 (37.5)	4(1)	38.1 (43.4)
			10(3)	19.1 (27.4)	9(1)	45.9 (53.2)

8(2)は、タイルを規則的に並べていき、事象と式の対応を的確に捉え、事柄が成り立つ理由を説明する設問でした。「活用」に関する問題です。いろいろある囲み方で、一つの例が示してあり、これを参考にして説明を完成させる記述式問題です。文字の式の項や係数の意味が理解できていないと正しく記述することができません。無解答率も39.2%で、全設問で最も高い結果でした。数量を文字で表したり、等式の関係を考えさせたりする中で、その意味を捉え

られるように丁寧に指導していきます。

③(1)は、一次式の減法の計算をする基本的な $1/5x - x$ という問題でした。県平均を 6.1 ポイント下回り、到達基準のおおむね達成基準 50%も下回っています。他の③(2)や(3)では、一次式を数でわる計算、分配法則を用いた文字式の計算でしたが、正答率はそれぞれ 64.9%、41.2%であることから、単純な一次式の減法ですが分数が入ると正答率が下がる傾向があります。今後、文字の式や方程式などでも計算力が、より必要になります。その都度、丁寧に振り返りながら定着を図っていきます。

⑩(3)は、反比例のグラフ上の点の座標から、 x と y の関係を式で表す基本問題でした。点の座標 (2, -5) を読み取り、 y を x で表せばよいのですが、正答率は県平均を 8.3 ポイント下回り 19.1%でした。授業で扱っていますが、定着できていません。グラフをかくばかりでなく、通っている点を読み取り、積が一定になっていることを調べる学習活動などを位置付けていきます。今春の県立高入試問題にも出題されました。

④(1)は、文字を含む項 $x/2$ について、 x の係数を選ぶ選択問題でした。基本問題ですが、正答率は 38.1%で県平均を 5.3 ポイント下回っており課題です。「係数」や「項」、「次数」など基本的な用語は日頃から使うようにし、生徒が説明したり発表したりするときも補足説明の中で、意識させるようにしていきます。

⑨(1)は、比例定数の意味が問われていますが、正答率は 45.9%でした。県平均を 7.3 ポイント下回り、定着していません。本設問も選択式の基本問題で、 $y = 3x$ の x の値とそれに対応する y の値の関係について、「 y の値を x の値でわった商はいつも 3 である」ことが選択できていません。単純に「比例定数は何ですか」のような発問に終わらず、商が一定になっていることなど、比例の性質まで広げて考えられるようにします。

(5) 理科 (2年)

全 31 設問の平均正答率は、40.1%で、県平均の 42.2%より 2.1 ポイント下回り、観点別においてもすべての観点で県平均を下回っており、その中の「観察・実験の技能」観点は、県が示す到達基準のおおむね達成の基準値 51.4%と同等でした。設問別で次のような課題が見られました。

観点別・問題別平均正答率等 ※ () は県平均

	科学的な思考・表現		観察・実験の技能		自然事象についての知識・理解	
	平均正答率	()	平均正答率	()	平均正答率	()
平均正答率	28.8	(29.1)	51.4	(53.1)	40.9	(43.9)
無解答率	4.3	(5.3)	7.4	(6.2)	11.9	(10.9)
問題例	③	7.2 (13.2)	⑦(1)	21.1 (29.5)	⑦(3)	24.2 (37.5)

③は、水の量による水圧の変化について調べる実験を構想する「活用」に関する選択式問題でした。水圧が水の量で変わるかどうかを調べる実験をするために、どのように条件を設定すればよいか理解できていません。誤答からは、実験の条件制御として、1つの条件を変えるときは、他の条件を変えてはいけないということは理解できていますが、穴の高さという条件を変えてしまうと、もともとの穴から出た水の飛距離と比べることができないということを考えることができていないことが分かります。水面を高くしてしまうことで水の量だけでなく水の深さという条件まで変わってしまうことが結びついていません。実験の目的に応じて条件制御を行うような実験を計画させる場面を設定したり、どのような条件を変えてはいけないのか

などの計画を立てるような学習場面を設定したりします。

⑦(1)は、炭酸水素ナトリウムの熱分解を、適切な理由を基に安全に行うことができるかが問われ、試験管の底を少し上げて固定する理由を答える記述式問題でした。発生した液体が加熱部に行くことが書けておらず、実験は行っているものの根拠が理解できていないと考えられます。また、(3)は「原子」「分子」に関する知識を問う短答式問題でした。採点基準が完全正解であったこともあり、正答率は24.2%で県平均を13.3ポイント下回り、おおむね達成の基準値50%を大きく下回りました。無解答率も19.6%で高い状況でした。基本的な知識として、日頃から用語を使い、定着を図ります。

(6) 理科 (1年)

全29設問の平均正答率は56.7%で、到達基準のおおむね達成基準50.0%は上回ったものの、県平均を2.7ポイント下回りました。しかしながら、観点別では、「科学的な思考・表現」及び「観察・実験の技能」、「自然現象についての知識・理解」すべての観点で、おおむね達成基準を上回りました。

観点別・問題別平均正答率等 ※ () は県平均

	科学的な思考・表現		観察・実験の技能		自然事象についての知識・理解	
平均正答率	52.7 (53.7)		61.2 (62.5)		56.0 (61.0)	
無解答率	3.8 (3.1)		4.9 (4.6)		11.2 (6.7)	
おおむね達成基準	41.9		52.2		53.8	
問題例	⑫	30.7 (43.7)	③(1)	32.8 (32.5)	⑪(1)	31.8 (52.3)

⑫は密度についての知識を用いて、示された金属が何であるかを推定する「活用」に関する短答式問題でした。到達基準のおおむね達成基準35%を下回り、30.7%でした。採点基準が①～⑤の完全正答であったため正答率が下がったことも考えられますが、考え方が分かるような出題形式でした。まず、銅の質量と密度から体積を計算して、同じ体積の金属Aの質量が43.8gであることから密度を計算し、金属Aの物質が「すず」であることを判断するものでした。「密度」の概念が理解できているかがポイントとなります。単純な質量と体積から密度を計算だけでなく、総合的な理解につながるように授業を位置付け、定着を図ります。

③(1)は「観察・実験の技能」観点で、光合成に関する実験を安全に行うことについての記述式問題でした。県平均を0.3ポイント上回っていますが、おおむね達成基準50%を下回っており課題です。オオカナダモの葉をエタノールの中であたためるとき、直接火であたためず80～90℃の湯を使う理由を考える内容でした。日々の授業で行っている実験についても、生徒に目的意識をもって観察や実験を行わせ、何が獲得でき、何が分かるようになったかを明確にさせて、一連の学習を生徒に自分のものとしてとらえられるようにします。実験方法の根拠についても丁寧に扱っていきます。

なお、本調査に記述式問題は3問あり、本校の平均は49.1%で、県平均より2.3ポイント上回っていました。

⑪(1)は、水とエタノールの混合物を沸騰させて気体にし、それをまた液体にして集める方法について、「蒸留」を理解しているかを答える短答式問題でした。正答率は31.8%で、県平均を20.5ポイント下回り、無解答率も34.9%で高い結果となりました。定着できていないこ

とが分かります。確かに実験はしていますが、結果や考察が言えるだけでなく、適切な言葉を使いながら「蒸留」について、説明ができるように、また習慣化していくようにします。

(7) 社会 (2年)

全 30 設問の平均正答率は 53.0%で、県平均の 53.1%を 0.1 ポイント下回りましたが、到達基準のおおむね達成基準 49.0%を上回りました。改善しています。

一方、「社会的な思考・判断・表現」観点においては、おおむね達成基準 37.0%を下回り、県平均も 1.1 ポイント下回りました。

観点別平均正答率及び無解答率 ※ () は県平均

	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
平均正答率	32.4 (33.5)	57.4 (61.0)	57.1 (55.8)
無解答率	25.3 (20.2)	3.0 (2.7)	11.9 (10.4)

記述式問題が 5 問ありましたが、県平均を上回ったのは 2 問でした。記述し説明する設問については苦手意識が高い傾向があります。自分の意見を書く場を設定するなど、日頃から問題意識をもつようにします。

設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	2(4)	2(1)	1(5)
平均正答率	17.8 (20.7)	36.0 (45.2)	16.2 (23.8)
無解答率	24.4 (18.2)	15.7 (9.5)	21.3 (17.8)
観点	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
出題の趣旨	資料を基に、日本の排他的経済水域の面積が、ブラジルと比べて広い理由を説明することができる。	東京とニューヨークの時差を求めることができる。	オーストラリアで他の国や民族の様々な文化や生活習慣を尊重し、共存を目指す社会(主義)が多文化社会(主義)であることを理解している。

2(4)は、資料を基に、排他的経済水域の面積の関係について、その理由を説明する「活用」に関する記述式問題でした。無解答率も 24.4%で高い結果でした。「資料からどのような事実が読み取れるのか?」「読み取った内容を関連付けるとどのようなことが言えるのか?」などを考える活動を位置付けるようにします。また、生徒が資料から読み取った情報や社会的事象について調べたことや考えたことを、ペアやグループ又は全体で話し合う場面やまとめる際に、根拠や理由を示して分かりやすく説明したり、簡潔な文章にまとめたり、キーワードを使って整理したりできるような活動を位置付け、改善を図ります。

②(1)は、東京とニューヨークの時差を求める短答式問題でした。日本は東経 135 度、ニューヨークを含む地域は西経 75 度を表している資料から考えなければなりません。正答率は 36.0%で、県平均を 9.2 ポイント下回りました。時差については、単に時差を計算させる指導の上に、十分に根拠を理解させ、それに基づいて計算できるようにします。また、時差のある海外の様子を衛星中継する映像を活用したり、国際電話で海外にいる人と話をする場面などを想定し、実際の生活場面と結び付けたりするような活動を授業展開に位置付けるようにします。

①(5)は、オーストラリアに関する出題で、他の国や民族の様々な文化や生活習慣を尊重し、共存を目指そうとする社会（主義）を「多文化社会（主義）」と答える短答式問題でした。正答率は全問の中で最も低く、16.2%でした。無解答率も 21.3%で高い結果となりました。一問一答形式の小テストや重要語句を機械的・表面的に記憶しているかを確認するような発問を行うだけでなく、生徒が社会的事象の意味を考えたり、事象の特色や事象間の関連を説明したりするような発問をするようにし、改善していきます。

(8) 社会（1年）

全 30 設問の平均正答率は 54.7%で、県平均の 57.1%を下回りました。観点別で県平均を上回ったのは、「社会的な思考・判断・表現」観点の 1 つに止まりましたが、すべての観点で、おおむね達成基準を上回りました。

観点別平均正答率及び無解答率 ※（ ）は県平均

	社会的な思考・ 判断・表現	資料活用の技能	社会的事象について の知識・理解
平均 正答率	43.9 (43.8)	64.2 (67.7)	54.0 (56.7)
無解答率	20.2 (12.1)	1.2 (1.1)	9.9 (7.6)
おおむね 達成基準	40.0	49.3	51.7

設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※（ ）は県平均

設問	②(4)	⑥(4)	⑥(2)
平均 正答率	31.1 (35.9)	39.3 (44.9)	12.8 (29.5)
無解答率	12.2 (8.1)	5.1 (2.8)	24.5 (18.0)
観点	社会的な思考・ 判断・表現	資料活用の技能	社会的事象につ いての知識・理解
出題の 趣旨	資料を基に、寒帯 の気候区分（ツン ドラ気候）の特徴 について説明す ることができる。	資料から、藤原氏 が力を強めたこ とを読み取るこ とができる。	東北地方の蝦夷 の反乱を鎮める ため、征夷大將軍 に任命された人 物が坂上田村麻 呂であることを 理解している。

②(4)は、「社会的な思考・判断・表現」の観点で、「活用」に関する記述式問題でした。寒帯の地域の都市ディクソンの雨温図から情報を適切に読みとり、気候の特徴を選択し、その理

由を記述する力が求められました。無解答率も高く、苦手意識が高いことが分かります。課題を追究したり解決したりする活動の中で、生徒が資料から読み取った情報や社会的事象について調べたことや考えたことを基に、簡潔な文章にまとめたり、キーワードを使って整理したりできるような場面を設定し、生徒の興味・関心を高める工夫を図ります。

⑥(4)は、1016年に藤原道長が摂政となったことから、このころ最も権力を強めた藤原氏についての説明文を、示された資料から読みとる選択式問題でした。正答率は39.3%で県平均より5.6ポイント下回り、到達基準のおおむね達成基準45%にも到達していませんでした。示された資料は2つあり、承和の変、応天門の変など藤原氏に関する主な事件が説明されたものと公卿に占める藤原氏の割合の変化を表す資料でした。両方を関連付けて読みとる力が必要で、選択肢の中から、「朝廷の高い地位(位)を占めている藤原氏の割合が、1065年に最も高くなっている」が正しくないことと判断しなければなりません。生徒が時代を大観できるように、時代の流れや前後の関連を確かめられるように、日々の授業を丁寧に扱います。

⑥(2)は、坂上田村麻呂を答える短答式問題でした。正答率は12.8%で、最も低い設問でした。無解答率も24.5%で高く、知識が定着していません。一問一答形式の小テストや重要語句を機械的・表面的に記憶しているかを確認するような発問を行うだけではなく、生徒が社会的事象の意味を考えたり、事象の特色や事象間の関連を説明したりするような活動を位置付けます。また、単元や授業のまとめをする際に、生徒が、本単元や本時で学習したことや既習事項を活用して、自分の言葉で説明したり、まとめたりできるように意識します。

(9) 英語 (2年)

全28設問の平均正答率は44.5%で、県平均の53.0%及び到達基準のおおむね達成基準46.4%をどちらも下回りました。県平均を上回った設問数は2問に止まっています。また、観点別では、すべての観点が県平均を下回り、大きな課題です。

観点別平均正答率及び無解答率 ※ () は県平均

	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語・文化についての知識・理解
平均正答率	25.5 (38.3)	49.7 (58.2)	32.0 (41.4)
無解答率	20.2 (16.6)	9.5 (7.5)	16.9 (14.4)
おおむね達成基準	45.6	45.6	47.5

設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	⑧(2)	⑦(3)	⑨(3)
平均正答率	5.1 (19.8)	2.0 (9.9)	8.6 (20.5)
無解答率	35.5 (26.8)	47.7 (38.0)	4.1 (4.2)
観点	外国語表現の能力 及び 言語・文化についての 知識・理解	外国語理解の能力	言語・文化についての 知識・理解

出題の趣旨	疑問文の構造を理解し、語と語のつながりに注意して正しく書く。	ALT の話を受けた感想の要点を考える。	対話文を読んで、語と語のつながりに注意して正しい語順で書く。
-------	--------------------------------	----------------------	--------------------------------

8(2)は、ナンシー(Nancy)とタク(Taku)の対話を完成させる記述式問題でした。正答率は5.1%で、無解答率も35.5%でした。応答文 I will eat Chinese food. に対する疑問文を do と there を含む5語以上という指示にしたがって英文を書くものでした。will という助動詞と疑問詞を取り入れた英文 What will you do there? を書くことができていません。疑問文の構造を理解し、状況に合った文を正しく書いたり、語と語のつながりに注意して正しく書いたりすることが課題です。言語活動を行う際に、生徒の発話を録画して視聴させたり、発話したことを書かせたりすることで、生徒自身が自分の発話した内容を振り返り、疑問文の構造を理解し、語と語のつながりに注意して、状況に合った文になっているか見直せるように工夫します。

「外国語理解の能力」の観点には18問あり、平均すると49.7%で県平均を8.5ポイント下回るものの到達基準のおおむね達成基準45.6%を上回っていました。ただ、この観点の問題で、7(3)は、「活用」に関する記述式問題で、正答率は全問中で最も低く2.0%でした。無解答率も47.7%で半数の生徒が何も書いていないこととなります。問題の内容は、ALT が食料廃棄(food waste)の問題について話したあとに、英文で感想を書く場面で、本文中の語句を使って要点を4語以上で書くものでした。内容の前後の関係をつかんだ上に、十分な理解が求められます。ポイントは本文の最後にある「I said that Japan has a nice word, but people in Japan throw away a lot of food too.」に注目する点でした。ここから、I didn't know that [] に意味がつながるように考え、Japan throws away food を答えるものでした。難易度の高い設問ですが、日頃から生徒の内容理解が深まるような学習活動が必要です。本文の内容理解の場面で、人物の心情や場面の状況について、教師が、事実発問・推論発問・評価発問の構成に沿って発問し、生徒が内容理解を深められるようにします。

9(3)は、対話文を完成させるために、語句を正しく並べかえる記述式問題でした。正答は、「I was buying a book to read.」ですが、正答率は8.6%、県平均を11.9ポイント下回りました。到達基準のおおむね達成基準より、41.4ポイント下回っています。What were you doing? に続く対話文として、全体的な意味も考えなければなりません。「I was buying to read a book.」という誤答が多くを占めていました。先入観で、read a book の部分が日頃の慣れた言い方であることも要因の1つと考えられます。語順や修飾関係などにおける英語と日本語の違いに配慮しながら、関連のある文法事項についてはより大きなカテゴリーとして整理して理解できるように工夫します。

(10) 英語 (1年)

全26設問の平均正答率は54.2%で、県平均の65.2%を下回っており、観点別において、すべての観点で県平均を下回りました。一方で、「外国語理解の能力」観点はおおむね達成基準49.4%を8.9ポイント上回っています。

観点別平均正答率及び無解答率 ※ () は県平均

	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語・文化についての知識・理解
平均正答率	40.2 (55.2)	58.3 (67.3)	48.4 (61.9)
無解答率	24.3 (13.3)	7.0 (4.0)	16.8 (9.3)

おおむね 達成基準	48.1	49.4	50.6
--------------	------	------	------

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	9(2)	7(1)	12(3)
平均 正答率	27.5 (34.4)	14.0 (18.6)	36.3 (56.1)
無解答率	29.0 (17.0)	22.3 (13.3)	31.6 (15.7)
観点	外国語表現の能力 及び 外国語理解の能力	外国語理解の能力	外国語表現の能力 及び 言語・文化についての 知識・理解
出題の 趣旨	対話文を読んで内容を 理解し、適切な語を書 く。	説明文を読んで、話の展 開に応じた語を捉える。	質問の答えを適切な表 現を用いて書く。

9(2)は、適切な語を1語入れて、対話文を完成させる次のような短答式問題でした。

A: Are you from Saga?

B: No, I'm not.

A: [] are you from?

B: I'm from Fukuoka.

正答率は27.5%で、県平均を6.9ポイント下回りました。無解答率も29.0%で高い結果でした。対話の流れを理解した上で、Whereを答えなければなりません。

7(1)は、日本の学校給食とアメリカの学校での昼食について発表した原稿を読んで、空欄に入る単語1語を書く短答式問題でした。

Do you like school lunch? I like the school lunch in Japan. It is very good. We have it in the classrooms, but in [A], we don't do that. Look at this picture. We have lunch in the cafeteria in America. Many students buy food in the cafeteria.

This difference is interesting.

という説明文から内容を理解し、話の展開を踏まえ [A] に入る1語をAmericaと判断しなければなりません。このように前後の文脈を理解し推測し、全体を読んで正解を導き出すような、思考を必要とする問題を苦手になっている傾向が見られます。日々の授業では、内容的にまとまりのある複数の英文を聞かせる際に、聞く必然性をもたせるために、全体の概要や内容の要点など、聞き取るポイントとして何を捉えるかを具体的に発問した上で、必要な情報を理解できるようにします。また、聞いて得た情報を整理して、人に伝えてやり取りしたり、書いてまとめたりして、内容をどれくらい理解したかを、生徒自身が確認できるような振り返りの活動を適切に位置付けるようにします。

12(3)は、What do you do on Saturday? という質問に対する自分自身の答えを3語以上の英語で書く「活用」に関する記述式問題でした。無解答率が最も高い設問でした。正答率も36.3%で県平均を19.8ポイント下回りました。授業ではスピーキング中心の活動でしたので、今後は書く活動にまで広げ、丁寧な指導をとおして定着を図っていきます。